

Salon d' AALA

サロン

ダーラ

2019. 5. 1.

No.114

元軍人らと

中国東北地方の戦跡巡り

加藤 明美

No 1 1 2に書きました三光作戦は、主として中国の南方で日本軍が行いました。今回は、北方での、侵略の事実を書きたいと思います。

中国の国土は、皆様ご存知のとおり、日本の26倍あり、一般的に黄河を挟んで、小麦文化の北方とお米文化の南方に分かれます。気候風土、衣食、住、言語（標準語は北京語）等大いに違います。北方でも、ロシア、モンゴル、北朝鮮と接する東北地方での戦跡巡りです。日中戦争時は、満州と言われた地域です。

私は、1985年～1990年頃にわたって、旧関東軍、旧満鉄、旧開拓団の人達又その家族達が、懺悔の気持ちと、侵略していた地方の懐かしさ、旧戦友達の交流等、複雑な思いで、幾度も訪中されるのにお供をいたしました。

関東軍の関東とは、旧満州のうち、日本が当時中国から租借していた遼東半島一帯を満州と呼び、満州鉄道を管轄する地域で、その警備に当たった日本軍を関東軍と呼びました。

旧戦地訪問にあたって、当時迷惑をかけたお詫びの印でしょうか、救急車を前もって大阪港から吉林省で、北朝鮮国境の通化市にプレゼントのために届けました。いよいよ贈呈式の時、その救急車は、乗用車に変身していました。通化市民に役立つようにプレゼントした日本側は哑然、でも文句は言われませんでした。

当時の関東軍の人達の中には、中国人を人間とは思わない思想を持った人が多数いたようです。例えば、山東省の済南は、温暖で、すごしやすいし、風光明媚な青島は旧ドイツ軍が1914年頃に占領していた所で、赤い屋根に緑の家々で、海に映えた美しい風景のこれらの地の住民を北朝鮮国境などの厳しい気候の場所へと集団で移住させたのです。その目的は、男の人達を満鉄の汽車を走らせるのに必要な石炭を採掘する為に、家族がいれば逃亡しないからです。

その証拠に、私がこの辺りを散策しながら、家庭訪問をして「どこのご出身」と聞けば、大抵、山東省とか済南などと返事が返ってきました。

私は、当時のことを思えば、辛く胸に刺さりました。ある時、同行した人達と、当時とあまり変化のない街を車でゆっくりと走っていると、時には奇異なものが目に入りました。それは、鉄格子が嵌められた洞窟です。彼等に聞きますと「タコ部屋」との返事、何事もなかったような表情で。彼等が実践していたかどうかは知りませんが……。重労働から逃れようとした人達をここに罰として入れたのです。この通化の近くに鴨緑江が流れています。この江の真中が北朝鮮との国境になり

ます。

今の人口は、270万人の大きな市ですが、70数年前の当時は3万人程度だったのです。ところが、日本の敗戦が色濃くなった頃には、ロシア軍が入ってきました。侵略していた旧軍人や旧満鉄、旧開拓団等の人達はここへ逃亡してきました。そこで、この人口は、相当数膨らみました。この時の事情を詳しく覚えておられる現在83歳の新潟の男性がおられます。私は、毎年五年間ほどメンバーを変えつつも、この通化に時には、20人ほど、時には、30人程と行きましたが、彼は、一昨年まで、約33年間、時にはひとりで、時には、3~4人で、ずっとこの通化へと通われました。すでに親しくなっている通化の人達に会いに。彼の心には、この地には消せない思い出があるのです。父親の関係で毎日菓子作り専門の軍人等が来て、美味しいおやつを作っていたと話されました。廻りは、貧しい中国人が、多い中で、こんなことでよいのかと思ったと述べられました。

当時10歳の小学校4年生、父親がロシアの捕虜として連れて行かれ、本人は、母親や妹達と関東軍が準備したトラックで通化へと逃げました。その時にこの10歳の子供が目にしたのは、先ず乗るのは、旧関東軍やその家族、旧満鉄関係の人達です。開拓団や、その他の人達には、トラックにしがみついても、足蹴にして、乗せなかったと証言、即ち棄民です。

その後、彼の母親と下の妹が亡くなり、もう一人の妹と食べてゆかねばならず、頼る人もなく、ドンゴロスに身を纏い、妹を紐で柱に括り、本人は、ロバの代わりに、目隠しをして臼を引き、ようやく食にありつけた、とのことでした。小学生の身では、あまりにも酷だったのと、戦争の悲惨さをよく語られました。其の後、このように通化へと通われる中で、体験を一冊の本にまとめられました。

4年程前、彼に平和を願う会に講演の依頼をしましたら、快諾。父親と同じ獣医の身で、大変お忙しい中を手弁当で、わざわざ新潟から、京都府城陽市へ来てくださり、長時間、当時のことなど、いかに平和が大事かと話してくださいました。

この通化で待ち受けていたのが、1946年2月3日、日本軍の一部が武装蜂起し、これにより日本人に対して、一週間にわたって、拷問と公開の銃殺刑が行われました。その時は、日本人に対して、見せしめの目的で、皆この近くの小学校に集められました。

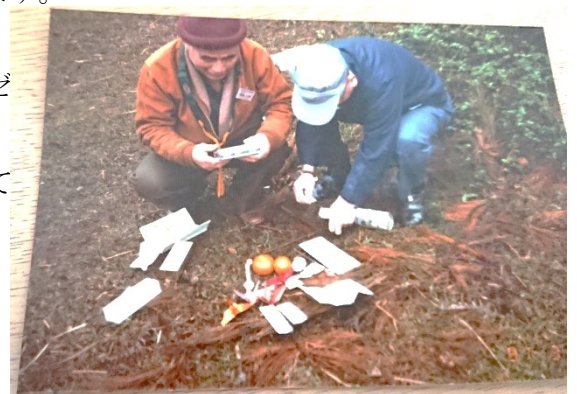
この小学校の裏山には、500人余の日本人が埋められています。

私達は行く毎に、ここで簡単な法要をしますが、その時には、この学校の校長先生と会い、全校生徒の数だけ鉛筆をプレゼントして、この裏山での法要を暗黙の了承を得ていました。

だが或る時、No.112で述べましたように、お線香の煙を立てお供えをして法要をしておりましたら、山から二人の男性が下りてきて、「何をしてんのや」との詰問、一目瞭然、

「この通りです」と私が申しますと、「日本人は、銃など持って戦ったが、中国人は駆り出された上に、木刀で戦わされた」と話され、険悪な雰囲気になったこともありました。

この地に於いて、忘れ難いひとりのご婦人がおられました。白玫さんと中国名に改姓されましたが、日本人で、敗戦後、日本人がほとんど引き揚げられたにも関わらず、「このような日本人もいる」と中国側に示したかったと残留されました。白髪の美しいご婦人でした。彼女が居られたおかげで、私達は安心して往来をしていました。この通化市では、彼女の信頼度は、厚いものでした。彼女は、



「年に1回日本語が話せる」といつも私達が行くことを首を長くして待って下さっていました。彼女は、認知が進み、数年前に亡くなられたようです。私達が、この地にすれば、彼女は太陽のように輝いて見えました。

1口メモ

- 小麦文化の代表には、餃子があります。中国では、水餃子が好まれます。焼餃子は、残った時のみ食されます。餃子の餃は、年末に、全家族が集まって作り、年が明けましたら、それをいただかれます。即ち、昨年と今年が交わるという意味があるようです。
- お米文化には、米粉があります。雲南の方面ではビーフンやお米をアレンジした料理が沢山あります。

選挙に行こう

『よいまし』なものに 秦 保恵



世間は「元号」で騒いでいます。(なるべく『選挙』に注目しないようにという作戦だ、という人もおります) 少し前に、安倍氏の憲法草案を学習したことがあるのですが、その時の講師の先生が「日の丸・君が代の押し付けに比べて、元号の方はトーンダウンしているようですが、なぜだと思いませんか」と聞かれたのです。その時私はたまたま講師の真ん前あたりに座っており、講師の先生と目があってしまって、「なんか言わなまずいかな」と思い、「アメリカでは使わないからですか」と口から出まかせを言ってしまいました。すると先生は「そうです」とおっしゃったのです。(よく考えたら日本以外では使いませんよね)

私の住んでいるのは京都でも東山区、東山のふもとで葬送の地でした。今でも「高貴な方」の墓があたり一面なのですが、(もちろん「墓」なんか作ってもらえない庶民は風葬だったそう) 山の中に泉涌寺というのがあって(御寺泉涌寺、お寺じゃなくて「みてら」泉涌寺と呼びます)そこへ行くと歴代の高貴な方々の位牌がずらっと並んでいますが、ちょっとまえまであのおうちもみんな仏教徒だったのですね。元号というのは皇帝が時間も支配するという思想だったそうですが、今時この国でしか通じないものは、日本の大企業は世界を股にかけている(段々怪しくなってきたとはいえ)というのに使えないじゃないですか。この国の「高貴」な方も「神さんちゃうねん」と100年近く前宣言しました。世の中どう変わるかわかりません。北欧の人と話した時「うちだって50年前はこの国と似たようなものでした」ひどい政治を選挙のたびに『よいまし』なものにしてきたのです。日本にだって選挙があるでしょう」と言われちゃいました。そうだ、ぶつくさ言うだけでは世の中変わらない、みんなで選挙に行こう。

スプリング・エフェメラルを求めて西山へ

松田典子

スプリング・エフェメラルとは直訳すると「春の儂いもの」というような意味で「春の妖精」とも言われています。早春から初夏に花をつけ花が終わると地上部は消えてしまいます。私はここ数年そんな「春の妖精」に会いに西山へ出かけています。もうそろそろかなと天気予報と予定をにらめっこしながら、そして何よりも天気を優先してさあ今日だと出かけていきます。今春は3月2日ポンポン山に咲く福寿草を求めて善峰寺からしばらく続く急坂に息を切らせ釈迦岳を経てポンポン山に到着。ここ数日では最高の天気とあって頂上は満員状態。混雑を避けてリョウブの丘で昼食。

いよいよ黄色い妖精たちに会いにゆく。

猪や鹿の食害から保護された場所に福寿草が満開。保護監視されている方から「今日が最高ですよ」とうれしいお言葉。昨年来たのは3月15日すでに葉が大きく伸び始め福寿草は形を変えつつあった。

つぎはカタクリの妖精たちに会いに行く番だ。4月13日ここ数日では最高の天気のはず。皆思うことは同じで阪急東向日駅前にはハイカーであふれかえっている。さすが私鉄は臨機応変、南春日までの直行臨時便を出しますと。こんなにたくさんの人と結構きつい小塩山を登るのかと少々気が滅入る。行程は長くなるが大暑山から尾根歩きをしながら小塩山へのコースを取ることにする。皆さん早く花を見たいと焦ったか、このコースでは誰にも会うことがなかった。まず保護地区ではないがカタクリが自生するところへ。花の数は少ないが気に入りの花を見つけては近くで写真を撮ることができる。風もなく穏やかな陽に誘われてギフチョウがふわりふわり飛んでくる。カタクリにとまる瞬間を狙うが相手の事情もあって枯葉の上で休憩したり思うようにいかない。カタクリが花をつけるまで7、8年はかかる。葉っぱ

ばかりとおそろかにしてはいけない、葉に気を付けて踏まないようにするのは言うまでもない。

次に西山ネットワークの人たちが活動されている保護地、炭の谷、Nの谷、御陵の谷を訪ねる。昨年の台風による倒木除去や「ネットで鹿被害は免れたが猪にはやられました」などお話を伺う。可愛い花をたくさん見ることができるのは1年を通して保護活動されているお蔭だと感謝。次から次へと来るハイカーを後に今回一番のおまけ自生するシュンランを見に行く。恐る恐る崖を降りる。これでは鹿も猪も人の盗掘も免れるだろう。

「来年も会いに来るから咲いていてね」と祈りながらスプリング・エフェメラルを求め西山めぐりは終わる。

